

戦争が終わってから始まった戦争

一九四五年ポツダム宣言の受諾後に開始された占領は、市民にとって終戦を意味しなかった。

空襲や統制から解放され、ようやく取り戻したかみえた平穏な日々は、いまだ戦争の熱を帯びたまま勝者の暴力をむきだしにした占領軍兵士たちの車両暴走や暴力・武力によって無残に踏みにじられていった。

無抵抗の多くの人命が失われ、遺された家族は喪失と経済的困窮に苦しみ、からくも生き延びても重い障害に生涯が支配された。

日本全国各地で、とりわけ占領軍の基地のある地域で

繰り広げられ、顧みられることもなかった多くの被害事例を、一九五〇年代後半におこなわれた調達庁労働組合による大規模調査「占領期間中の被害者実態調査表」における被害者自身および遺族たちの生の声によって浮かび上がらせる。

調査当時占領下にあった沖縄をのぞく全国36都道府県での約一、三二〇の事例（一九四五〜五二年）は、戦争被害とはなにかを問いかける。

米軍の占領政策の現実を突きつける資料集！

編集復刻版

全国調達庁職員労働組合 調査

占領軍による

全6巻

人身被害調査資料集

● 揃定価 150,000円 (税込 165,000円)

● 配本 全2回配本

● 編・解説 藤目ゆき

占領期間中の被害者実態調査表

昭和33年9月調べ
全調査本部

あなたの住所	住所 札幌市	あなたの名前	氏名 岡
被害者の住所	住所 (札幌市)	あなたとの関係	養子
被害者の住所と名前	氏名 雄 (満20才) (男・女)	被害者の家族数	4人
被害を受けた場所	北5条西1丁目路上		
被害を受けた年月日	昭和27年 6月 26日 10時頃 (当満20才)		
被害を加えた人	不明 (進駐軍)		
被害の程度	死亡		
被害に対する県庁や政府から支給された見舞金の額			
1	昭和23年 / 月	終戦連絡事務局から	約 1,000円
2	昭和24年 月	から	約 6,000円
3	昭和 年 月	から	約 円
4	昭和 年 月	から	約 円
5	昭和 年 月		
6	昭和 年 月		
		合計	回

被害後の傷あとや生活の状況

被害者死亡後岡一がー
ーと四人の生活ですか余分
25年札幌鉄道局苗穂工務部退
を維持して居るのかやっています。

その他 (該当するものを○印をつける)

- 新聞・ラジオや小説などにあなた
のことが載っています。
- 今後の生活の見通しが立てられて
います。
- 見舞金追給が決まったとしたら
()

注意 裏面にもお書き下さい

被害を受けた時の状況を詳しく書いて下さい
被害を受けた場所はどんな所でしたか。そしてそれは何時頃でどんな風に被害を受けましたか。その時あたりに人や乗物などがありましたか。被害を受けた時の気持はどんな風でしたか。

遺族の私として被害当時の状況を申し述べます。
当時被害者雄は私の天にも地にも掛け替えない一人息子で当時私は5才で次第に体力も弱くなって来て居り、雄の成人するのを唯一の希望を抱いて札幌に転居して居りましたが、悪く被害当日10時頃被害箇所にて友人の佐久間君と立って来た時(二人共自転車に乗って居た)東から来た米兵と思はれる4人位のグループとすれ違おうとした時、この中の一人が混棒棒の棒で私の頭部を打ちました。この米兵の打撃が強烈であったため頭部骨折で軽傷と見做されたが翌朝8時頃死亡したものであります。私がその友人の急報で被害箇所附近の駅弁売場に行った時は他に私の息子同様に通行中被害を受けた5、6名(軽傷者)の人が居り、当時交番附近を流し廻り居た加害者を指差して「あれだ！あれだ」と云って居たが、巡査達は何事か急ぎ足で走り去って居ただけで、やり場のない怒りだけが私の胸中に渦巻いて居り、私は将来に甚き責めを受けるかも知れませんでした。あなたの外に同じような被害を受けた方を御存知ですか

その方の名前	石 雄	その方の住所	(札幌市) (死亡)
"	山 雄	(札幌市)	(死亡)
"	黒 雄	(札幌市)	(左眼失明)

刊行の辞

連合国防領期は闇の深い時代である。占領期は戦争と軍国主義からの解放と民主化という明るい側面がしきりに強調され、日本占領こそ輝かしい「占領の成功モデル」だといった言説が今も流布されている。だが占領期は、連合国防領軍が絶大な権力を行使し、その事故や犯罪のために市民が殺傷されてすら闇に葬られてしまう恐ろしい時代でもあった。

占領軍人身被害問題は歴史のミッシングリンクである。ポツダム宣言受諾までの焼夷弾空襲や原爆投下、沖縄戦など第二次大戦末の悲惨については多数の記録と証言が公にされている。また安保体制下の米軍駐留に伴う事故や犯罪は今に続く問題として多くの調査と研究が進められている。対照的に、その二つの出来事の間で発生した占領軍人身被害は、陽のささない暗い谷間のように人々の目から覆い隠されてきた。大戦の後日談か、安保体制の前史でふれるエピソードのような扱いはかなされず、忘れられてきたのである。

占領軍被害者ひとりひとりの生の声が綴られた本復刻版は、戦争から戦後へと途切れなく続く歴史の流れの連続性を民衆の体験から知る貴重な資料である。被害実態調査が行われた直後にはジャーナリズムや研究者から注目されながら、その後の長い年月、埋もれた状態になっていた。本復刻版は現代史の闇に封印されていた人々の体験を照らし出し、失われた戦中と戦後のリンクの正体を今に伝え、市民の現代史認識を刷新するのに貢献するだろう。

(編・解説者)

関連年表

1977	1972	1969	1962	1961	1960	1959	1958	1957	1956	1954	1953	1952	1951	1950	1948	1947	1946	1945												
12	5	7	11	11	6	4	1	10	9	9	7	12	1	4	9	10	4	4	9	6	12	11	9	9	5	1	11	9	8	
占領下の桜島不発弾爆発被害者、国家賠償請求裁判を鹿児島地裁に提訴。80年地裁は訴えを棄却、84年高裁で原告勝訴、89年12月最高裁で原告敗訴確定	沖繩本土復帰	呉の占領軍被害補償請求訴訟、最高裁で原告敗訴確定	全国調達庁職員労働組合、団結権を失い、解散	連合国防領軍等の行為による被害に対する給付金の支給に関する法律が施行。	新安保条約発効	東京高裁、東京在住の原告敗訴。以降、原告敗訴が相次ぐ	全国進駐軍被害者連合会、結成大会。国家賠償法の制定を求めて国会や地方議会への請願・陳情活動	全国都道府県議会議長会議、政府に占領軍被害者の救済を要望	占領軍被害者への補償に関する全国知事会決議	全国調達庁職員労働組合、占領軍被害実態調査を実施	総評第10回大会、占領軍被害者への完全補償を求める決議採択	西日本地区進駐軍被害者遺族会総会、国家賠償の確立を求める決議採択	群馬県で米兵が農民女性を射殺(ジラード事件)	二又トネル裁判、最高裁が国側の上告を棄却し住民の勝訴が確定	東京在住の占領軍被害者、集団で国を相手取り補償請求訴訟を提起	呉市在住の占領軍被害者、集団で国を相手取り補償請求訴訟を提起	呉進駐軍事故被害者連盟会(会長中安基五郎)が発足(広島県)	協定において駐留米軍犯罪に関する補償を規定	サンフランシスコ講和条約発効(日本の賠償請求権放棄・日米安保条約発効(行政協定)において駐留米軍犯罪に関する補償を規定)	福岡市、砂川村などで米軍B29の墜落が相次ぐ	朝鮮戦争に出撃する米軍爆撃機B26が山口県岩国市の民家に墜落	朝鮮戦争勃発	二又トネル被災者が東京地裁に集団で提訴。国に対して損害賠償請求	神奈川県で日本人3家族を殺傷したアフリカ系米兵アーミステッドの死刑執行	特別調達庁の設置	GHQは占領軍被害者の連合国防領への損害賠償請求権を否認する文書を発表	閣議決定「進駐軍による爆破作業、及びこれに類似する事故に因り、危害を受けた者に対する援護に関する件」	奈良市で日本人2名を殺した米兵ヒスクワに軍事裁判で死刑判決(後に減刑、釈放)	降伏文書調印 連合国防領対日占領開始	日本政府、ポツダム宣言を受諾。終戦の詔勅

1946年11月15日、山形県天童で、牛市場で牛を二頭買って帰る途上、七二歳の男性は、ものすごいスピードで突っ込んできた米軍大型ジープに轢かれ、頭蓋骨粉砕で即死。息子は「何せ相手は米軍だので如何せん、唯唯泣寝入の様でした、残念でした、情なく成ったのでした、戦争に敗けたのだから仕方無いと其の頃はあきらめてゐたものでした」

1947年3月5日、大阪府柏原駅前広場で、進駐軍がふざけ半分で積み卸し作業中の石炭を周囲の日本人に投げて喜んでいたりとき、いきなりトラックを突っ込ませ、四四歳だった女性が貨車とトラックに挟まれ即死。当時は燃料不足で彼らが投げる石炭を「鳩が豆を追いかけるごとく」必死に拾っていたところだった。

1947年4月30日、福岡市の道路沿いの狭い路地を歩いていたら三五歳の男性は、かなり酔った状態で娼家に入ろうとしていた米兵二人に鋼鉄の指輪様のものできなり殴り倒され、撲殺された。38時間後に看取った妻は「私等は終戦と共に戦争は済んだものと思つて居りましたが我等は故郷である地で此様な事が有つ

た。まだ息のある男性を歩哨兵はさらに銃の台尻でめつた打ちにしたため、3時間後に死亡。妻は「あまりにも変わりはてた姿に敗戦国民のなさげなさを米軍の仕うちをにくんでやまない気持で一ばいでした。その後いくとも県代議士に補償をたのんだが何ら音沙汰ありません。今日におよんでいる次第です」

1947年11月16日、日曜日の午後、子どもたち三人が、配給の粉を持ってパンを焼いてもらいに行き、家でとつておきの白砂糖や赤蜜で食べようと大喜びで土手際を歩いていた。そこに日本人女性を乗せてウィスキーを飲んで酔っていた米兵のジープが疾走、土手に駆け上る八歳の男児を追いかけようのにぼり、男児は両親の名を叫び続けたが出血多量で即死、女兒の一人も四五日間意識不明の後回復したものの、障害がのこり病み続ける。神奈川県高座郡の事件。

1947年12月12日、広島県呉市の路上で、狩留賀の米軍施設で衛生係として勤務していた四八歳の男性が、仕事の帰り道、ジープにより轢死。遺された妻は「働く事を知らない私は一家心中しようかと思つた事もいくたびかありました。たくわへて

ても良いものでせうか。余りにも人道を無視した事でわなないかと思いま

推せんします

沈黙を強いられしてきた人たちが肉筆で絞り出した証言

林博史

日本占領期の米軍の史料を調べると、当初は米兵の強かん事件の捜査報告書などがいくつもあり、おそらく米軍指導部も日本国民の反発を恐れていくらかの捜査をおこなっていたと思われるが、後になるとほとんど見つけられなくなる。しかしそのことは、米兵によるさまざまな犯罪がなくなったということを感じ味しない。

米軍や日本の行政当局から放置される中で被害を受けた人々は沈黙を余儀なくされ、その実態はわかりにくくなる。そうしたときに本資料集は、米軍が駐留することが一般の人々にとって何だったのかを圧倒的な事実で示してくれる。

この問題は占領終了後も続いており、米軍によって日本は守られているという言説が何を隠しているのか、人々にとって軍隊が何をもたらせるのか、あらためて考えさせる貴重な資料集である。人々の生の声が記されており、研究者はもちろん学生や市民にも読んでもらいたい。

(はやし・ひろふみ 関東学院大学教授)

もない私はこうしては居られないと気を取りかへし土方又は野良仕事に文字通り朝は朝星夜は夜星で働いて働き抜いて来ました。…くうしゅうにも水害にも無事であった夫が事もあろうにジープなどに被害を受けて命を捨てるとはほんとに想像もしなかつたのです。今頃は戦争はんざい者と言われて居た人や戦死者でも恩給でも有る様になりましたのでせう。どんな被害を受けたのも立派な戦死者だと云いたいです。…今こそ私の苦しい悲しい半生を申し上げる事が出来て嬉しく思います」

1949年4月13日、熊本県菊池郡の県道路上で工場へ出勤途上の二〇歳の女性が、最スピードの進駐軍の労務者輸送車に衝突され、翌日死亡。女性は父親の看護をし家計も支えていた。父親はすぐに「進駐軍と警察を通じ何回となく交渉致しましたが何分戦後の事として警察の運動も効無く泣寝入りしてました。進駐軍からも自宅に来まして金も与へる同情もすると云ひましたが見舞金もなくあり人情もなく横暴でうそつきであった事は事実でありまして一生私としては忘るる事は出来ません。私も老年になり毎日思ひ出します」

つて居ります。又米軍の日本人を馬鹿にした行為をうらみに思つて居ります」

1947年5月14日、横須賀市松ヶ浜沖に漁に出かけた男性は、進駐軍がいたらずらで発射した弾丸に撃たれ、30分後に死亡。家は戦争中の強制疎開で奪われ、兵士だった息子も未復員、残る子どもたちも小さかつたため妻は途方に暮れた。「本部の方にかけあいましたが負けた国ゆえ此方が悪くなくともそれは仕方がありませんと云われそのままになった」

1947年7月13日早朝、横浜市内の京浜国道バス停留所付近で三六歳の男性は後ろから来た進駐軍車両に轢かれ死去。一二歳を頭に四人の子どもとともに遺された妻は葬儀代まで借り、一度は自殺まで思い詰める。「その時は悲しみよりも口惜しさが一杯でした。いくら敗戦国と云え、まるで犬や猫を引殺す様なやり方だつたと思います。戦争さえなかつたなら、大切な主人をこんな被害を受けて現在までじっと泣き寝入りにならなかつた事と思います」

1947年8月6日、広島原爆投下から二年後、埼玉県の三ヶ尻キャン

プでは原爆記念日として朝から不気味な銃声が鳴り響いていた。キャン

プ内の工事現場で監督をしていた三七歳の男性は、現場に向かう途中、米兵がおどかさうといいたらずらで撃つた銃弾によって射殺された。妻は「当時は敗戦国の日本で占領期間中の事故、警察も立会ふことが出来ず、米兵の名前も教へることなく…今日まで私達はどんなに悲しい思いをして来たことでしょうか」「こんな無残な死に方が終戦後の日本にあったことは、敗戦国の悲しさとあきらめなければならぬのでしょうか。一家の支柱を失った私は、戦時ならともかく戦後の日本において戦場と同様に米兵に依つて射殺されたことがどんなにくやしかつたことか言葉や文字で表現できるものではありません。幾らお金をいたいても一家の支柱である夫の尊い生命には替へる事が出来ません。しかし、今日まで十二年の間、泣き寝入りをして来た私達に一日も早く補償して下さいることを政府におねがい致します。」

1947年8月20日、東京都立川の駐留軍キャンプで働いていた四一歳の男性は、帰宅途中知らずに立入禁止の場所を通つて歩哨兵に呼び止められたが言葉が通じず発砲され倒れた

いた男性にも死なれ「しばらくは農事その他に手を出すことも不可能な位に気落ちしてしまいました。当時は、正義と文明を口にして上陸したアメリカ軍が憎くてたまりませんでした」

1948年3月9日、仙台市の住宅地の入り口で、パンクした自転車を引いていた五四歳の男性は、暗がりから現れた米兵から「仙台ステーションはどこか」と聞かれ、片言の英語混じりで答えていた。そこにもう一人が現れ、大きい石で脳天めがけて打ちつけ、倒れた男性の体中を軍靴で踏みつけ金品を物色、被害者は意識不明の後死亡。遺された家族は「一家の働き手で大黒柱」だった男性を喪い、途方に暮れた。妻は夫の死に無気力になり、身体に無理をして死亡、息子は復員して間もなくで無職だったが無理をして働きそのため眼底出血で治療中、乳飲み子を抱えた息子の妻は慣れない力仕事をし続けその疲労から倒れ入院、療養中。「父が元気でいればまだまだ動めていた事が出来、恩給も貰へたのに全部駄目となり遺族のわれわれはまったく苦しい生活を送っている状態である」

ここに沖縄の事例は一件もない。しかしすべての事例は沖縄が受けてきた被害そのものだ

阿部小涼

資料集の調査対象ではなかつた沖縄で、今日、「基地・軍隊を許さない行動する女たちの会」が警察資料に現れない米兵による性暴力被害を継続的に収集してきた記録が、「氷山の一角」と言われる。この調査資料もまた、そう呼ばれるのだろう。それでもなおこの「氷山の一角」があればこそ、表面に現れない全体像を思い描くことができる。また記録されていないことによつてこそ、性暴力や心的外傷、環境汚染など、痛みの表現不可能性を想起できる。

調査表に肉筆で書き込むというプロセスは、身に受けた傷を思い出し、家族の語りに耳を傾け、それを通じて不正義であると認識する対話の実践でもあつただろう。今日の防衛施設局の前身である調達庁で働く人びとが、米軍施設整備という公務の矛盾や相剋に直面して、労働組合を持って取り組んだという史実は、国家への忠誠心で住民を弾圧することが常態化している現在、瞳目させられる記録である。

(あべ・こすず 琉球大学教授)

1949年7月21日、茨城県那珂湊市の畑で馬鈴薯掘り作業をしていた三五歳の男性に、米軍が機銃掃射の演習中、射撃場から方向のまるで違

う畑に機銃弾が発せられ、被弾、即死だった。付近には住宅も農作業する人も多くいた。男性の兄はインパール作戦で戦死、父親は頼りにして

編集復刻版

全国調査員労働組合調査

占領軍による

全6巻

人身被害調査資料集

●編・解説 藤目ゆき（大阪大学教授）

●体裁 B5判・上製・総約2700ページ

●揃定価 150,000円＋税
（税込165,000円）（全2回配本）

●推薦 林博史（関東学院大学教授）
阿部小涼（琉球大学教授）

第1回配本

2021年7月刊 本体75,000円＋税（税込82,500円）
ISBN978-4-86617-144-9

第1巻 北海道・東北・関東Ⅰ

第2巻 関東Ⅱ

第3巻 関東Ⅲ・中部Ⅰ

第2回配本

2021年12月刊 本体75,000円＋税（税込82,500円）
ISBN978-4-86617-148-7

第4巻 中部Ⅱ・近畿Ⅰ

第5巻 近畿Ⅱ・中国四国Ⅰ

第6巻 中国四国Ⅱ・九州



新刊のご案内

占領軍被害の研究

著 藤目ゆき

A5判・上製・約360ページ

予価5,600円＋税（税込6,160円）

2021年12月刊行予定



六花出版

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町1-28 電話 03-3293-8787 FAX 03-3293-8788 <https://rikka-press.jp>